

先進繡像玉石雜誌

前篇

五

第二七号
十册内第三

東 京 圖 書 館				
冊	號	架	函	類
四	三	三	三	和書門

59
Case
Sheet



交付

明治九年五月十一日

教育館

博覽會

先達肖像及雜誌卷第五

名和伯耆守源長年肖像并傳

舟上山糸和湊 元亨二年乃升



當直門 國司守護職乃差別

行幸路程

兵庫藥師寺

真跡文書

京の宅

二本一草乃と

大内裏諸門鴉尾

好法師壽像并傳

神風和記

冷泉万里小駝教

常盤井教

中宮乃小辨

堀川大相國

延政門院一索

鎌倉比企谷兼好住居地

鯉魚

平貞直

大佛

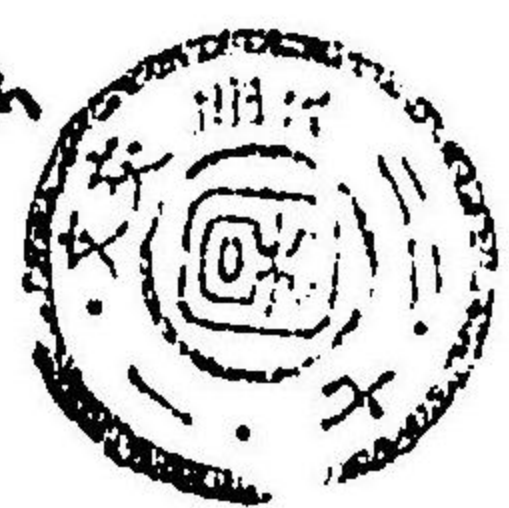
大覺寺所移徙

道我僧心

細物圖書料系

西冊 類傳記
九上 内國

三冊 三冊





名和伯耆守源長年肖像

名和其藏

山門靈山院 本曾然兼好菴室の地
 木辻長泉寺兼好家 兼好塔然 見好法師
 真跡和歌 曰天皇乃歌

名和伯耆守源朝臣長年ハ伯耆國會美郡名和莊地頭ハ
くもく元ハ又左郎長高と云遠く先祖を尋ねば村上天
皇乃皇子中務卿具平親王乃十五代乃孫ハくもく通き由緒を
きくく承久三年後鳥羽院乃北条義時を遣付あるへ
くもく國乃勇士をめぐり終けふ中乃守治揚る向く軍
あく所領を義時乃奪るもく名和竹素秋乃孫ハて同
きゆ高乃嫡子あり長年乃孫ハくもく家留たふのそあり以
馬乃道乃健うりくもく國中乃敵を盡く人あも無日
元弘二年二月七日後醍醐天皇華洛を御出ありく二月二日
隱岐島へ遷幸ありく知夫郡國分寺乃御所におくもく
都より輓の方あり杉程伯耆國名和湊まく五十九里餘名和湊より
隱岐島まく二十里ありちくもく合まく八十九里許とくもく

隱岐島乃守護職依々本隱岐判官清高佐々木源三孫義
代乃孫乃隱岐近國乃一族塩屋富士名を始くもく名和
村上の北軍まく催集めく皇居を守護くもくける天皇
慮慮深くかりまて守護乃武士ハ或時ハ巾盃を給る
ある時々恩詞をいけらまく程ハはくもく從ハ廉く兵ハ
出まおけふ聖運國ハくもく好くけるあも長年
乃弟ハ名和氏と云ものあり皇居の守護ふまたりたり
けるを天皇親くもく行氏たちまも心變り
て名ありける長年を語りくもく伯耆國ハ
老國ハ引返ま去りま行氏隱岐島ハ後ま順風を給
けふ内天皇ハくもく國分寺の御所を出陣ありく

おめさきと元弘三年閏二月廿七日春和湊へ漕寄らせ千
種頭中將忠顯朝臣を勅使せし長年々武勇の稱上聞
し達する間連の御迎ふ事上京都へ還幸乃計畧を施し
四海一統乃皇化を致し多うくを御迎ふ事上京都へ還幸乃計畧を施し
迷らまかり長年をうふ一族を集め酒宴しく居たりける
け由を承りて頭を傾け兎角の言申得たりける處に合
兼小太郎左衛門長重とて出くやけふり古より今に至る
弓矢取乃習ふに名を各と理乃二行をいふ我等素あくも
十善乃悉く憑り奉る此大事を馳走したる戸を軍門
お曝し其名を万代に傳えんと生前乃思出死後の名
譽たるとた一助了名に定めりてや御迎ふ事上京都へ還幸乃計畧を施し

計らひけり列座の一族二十餘人こゝに並儀了同しけり
長年ハ長重と共々湊へ御迎ふ事上京都へ還幸乃計畧を施し
ムへ取上り合戦乃用意あると云ふと鑑を多く肩小
あけりけ御迎ふ事上京都へ還幸乃計畧を施し
儲り無里けり長重着る鎧のより荒鷹を巻く表を
負進せぬり如くお船との山坊へ入御ありし事
米子の城より出雲國能義郡八林まき行程
二里の間に各和浦船と云ふありし事
長年辺邊の左家へ入を
あふとける米穀を二荷持運ひたりしものふの鳥目五百
とらとへしと觸たりたるハ十方より人夫數千人おまきり
かりと持送る程ふ一日の間に糧米ハ余石を運ひたり

隱岐島

出雲伯耆

乃地方

谷和湊

船とん

乃地圖

志水

乃

乃



五八

あゝいそ

乃

乃

乃

乃

乃

後醍醐天皇

名和長年

賜

秋



信州圖

此頃乃量ハ南都興福寺東金堂元亨二年乃計今京升
ル合六白二撮を容と大倅同ハかるハ色ハ五千餘石ハ今
乃口千二百十八不餘了あくる口斗を俵と一萬七百
八十七俵余たり
二俵を一荷とくハ色ハ九十三荷余たり
此運賃ニ千六百九十六貫七百五十文あり長
新の置櫛 龍城乃兵百又十騎とソハふより人敷を計
影るへ
了九七百五十人了及ふ御一騎五人とこの頃ハ積れる七
百八十人あくる口千二百十八不餘を食ふ子一子百五十餘日
を支ふ御一長年とるうふ名和莊乃地頭たり其富かくの
如し
残る金銀財寶人夫百姓等ふ分ち與へ玉後己ハ館子
火を掛く百五十騎乃兵を率一船了馳登る皇居を守

護かゝ守る長年一族同苗七郎と云老智勇たくりその
お里乃色ハ白布五百端ありけるを旗とあし松乃葉を焼く
烟ヲ薫く近國諸武士乃家くの文を書てけ乃木の板彼乃
筆ふそ立置けるは旗悉く筆乃嵐吹翻大勢乃山中ふ
馳葉里たふと覺く夥しくそ見へたりける去程同月廿九日
仇本隱岐判官清高おかく彈正左衛門尉同仇渡前司その外
塩治判官高貞富士名判官義綱等を始とて出雲伯耆
周防不見にケ國乃禁を催促とて之を餘珍みと船了乃
南北より押寄ける此船乃上とつふ此多大本子續きて
巖たぐ崎ち之方とて嶮とて地僻とあり俄不搭たふ城
あまははまく堀乃一處ハ堀ら以屏乃一重ハ塗とてくた

所々大木少く切倒し逆木を引居合の處を破つて搦
捕りて計あり寄手ハハハ事ハ見分と坂乃半々責
上里遙々率を向とせば松柏生茂と日影お闇と木陰
よ寂く乃旗に百流を雲を翻日小暎しく見えたりと
いや辺國乃者と由馳集里たりと賞をさうけ物計あり責落
さんとい難儀かまると心をなれと進むと後了日を暮
けあ斯く果すと大手搦手一同に南北乃路より責止る
城中よりハ勢乃程を敵より見りてと本の向くハ終
仗く散りて落矢うまを射たりけと搦手乃大将佐二本
弾正左衛門尉たる放ちくと由知らぬ流矢了衣の眼より頭
惱をうけく射ぬの色々色の涙もあへせ其倒ふ馬より落

死たりける其子の兵五百余騎大将を討と色を失ふ
一戦ふる及人引退く佐佐前司ハ是をさく八百余騎を引
分り旗を卷甲を脱く城中ハ隊を隠岐判官清高ハ搦
子乃動静を爰ふる知早天より押寄一の本戸にまき荒
子を入替く責止まの城中より射子をまきつと射遠ふ
程ふいつ果愈るとも見へさるぬ日西り傾くあり一天俄
ひきくとき時たぬ雷鳴をさめく山谷を轟く風吹落すと
箭乃如く雨乃下と車軸ハ漂たへハ頃世乃中穂と
戦の場をりてと稀なるもの多うりハこの雨風を面
みまて眼暗手足あつとく働さゆと木落ノ一ふまて暫
く雨風を凌ぐんと云騒く長年是を見く射手を左

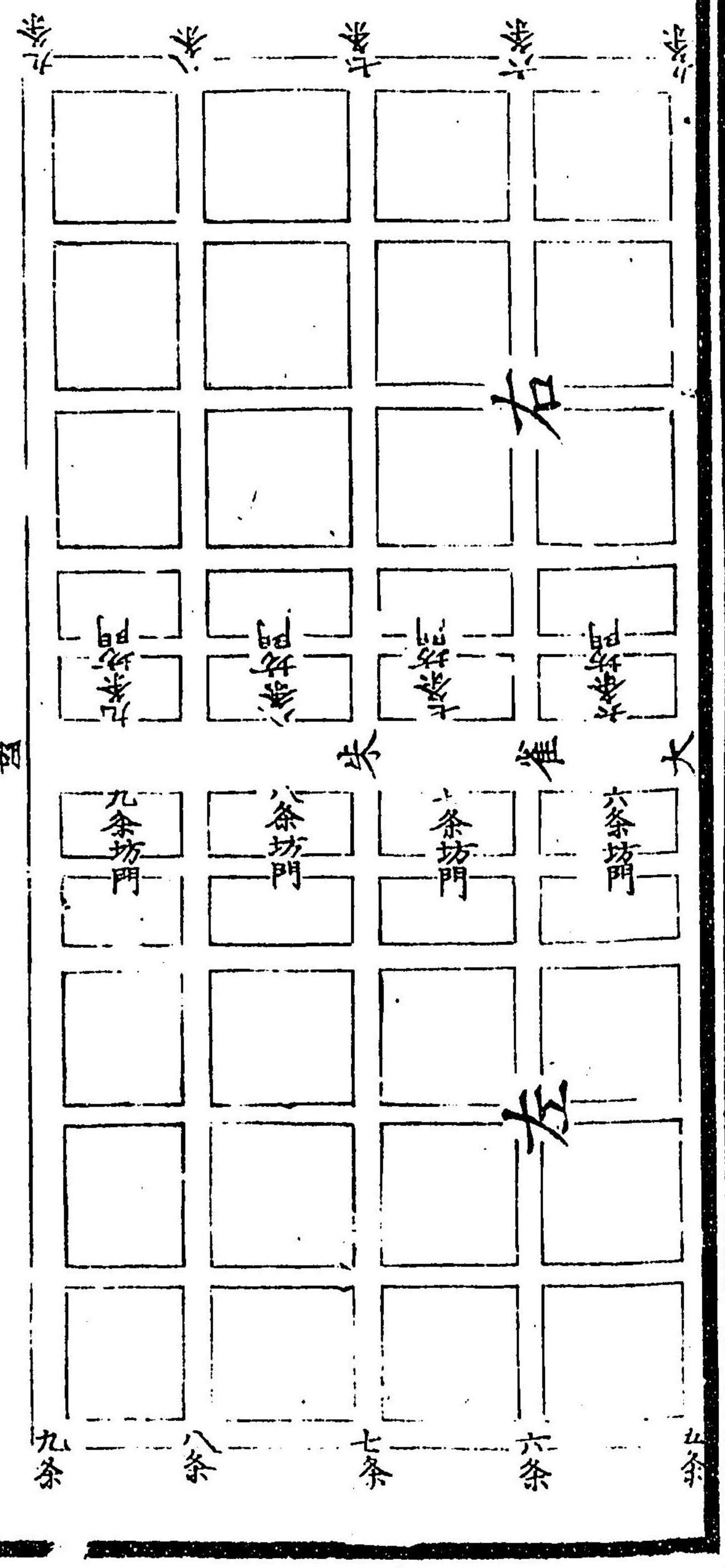
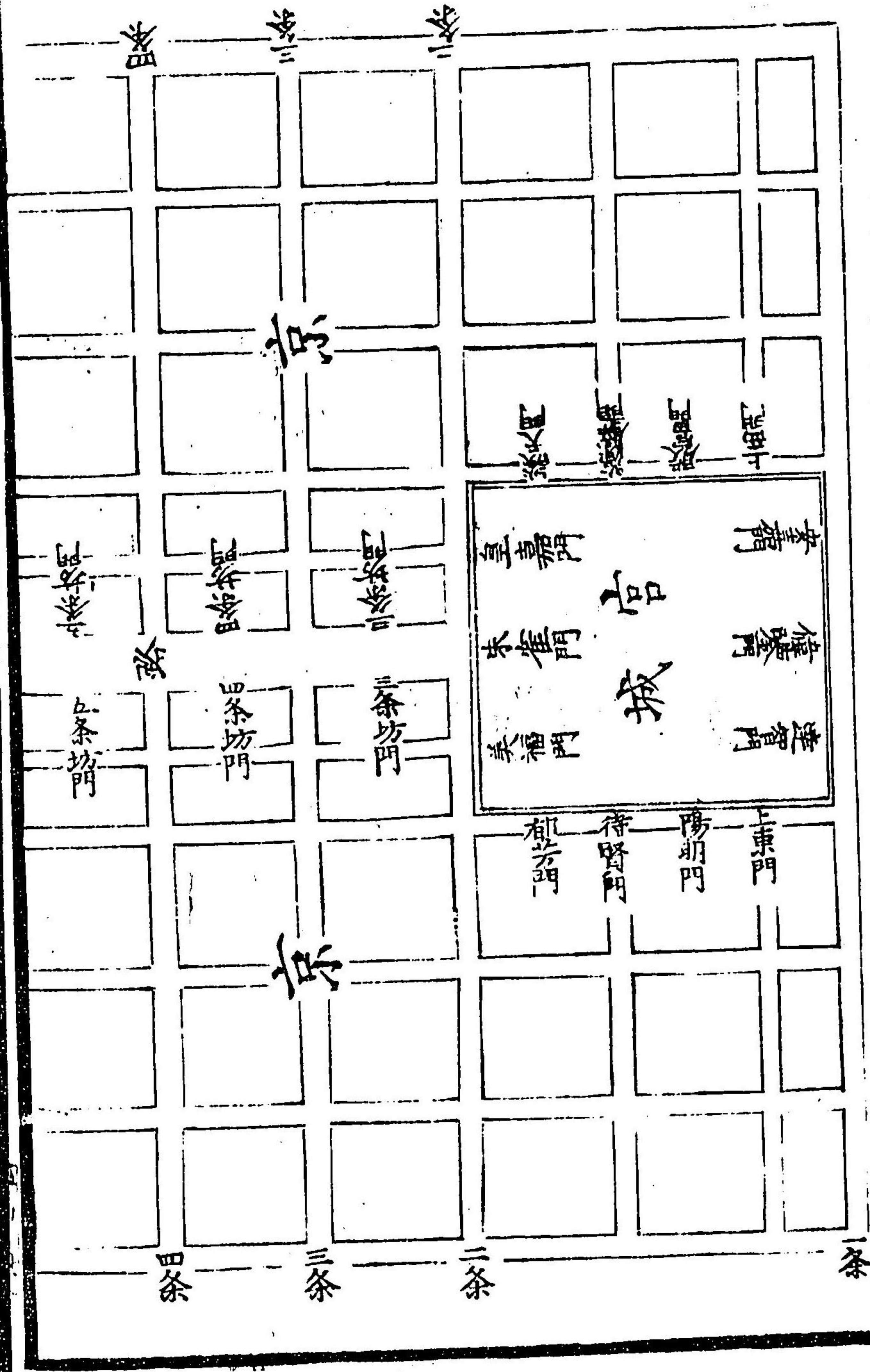
進め散らさず討まき先據乃端のゆるく知をゆさるや賢く
と長年を始め金身小太郎九郎尉長重おあしく小太郎
長成その外一類従卒をか抜つてく率をとり鋒をさへ
て責うつ後ハ大手乃寄手又百余人谷底へ暮おとされ衆
お控りて頭をくたさ己り持て取た刀を喉を貫ぬり色
く死する者數をうらむりおれ不清高の後陣を備えく入
替り合戦をゆ志以急く頼きく憑る塩沼富士衣朝公
令持黨元より官軍より志をいよむ勢か色は周をゆるく
漢高り切くつる清高り手の志周章色をく一支ゆふ以
本國より引退く塩沼富士衣小く責以けりハ漢高
僅り三十七騎おあされ船り取乃り隠岐島へゆりける

長年初乃軍り打勝りハ因幡伯耆出雲之ヶ國乃同
弓矢を推しお取らぬ者のあらぬハ無りけりあは併り長年
ハ戦功および定く勲賞あふるゆり長年九衛門尉補
とらぬ伯耆守小任とらぬ

令義解官位令り 衛門督 左右衛士督正五位三階とあり
職負令ふ衛門府ハ諸門禁衛出入乃れ儀時をいひ巡檢
志及ハ隼人門藉 人乃名をわきり 門勝 物乃負數を去りれ
と掌るといひ 左右衛士府ハ宮掖 西門の傍乃小門を控衛
隊仗を檢校一時をいひ巡檢一車駕出入乃前駈後駈乃
てを掌るといひ 左右兵衛府ハ閤門を分配るといふ是を
熟考さるふ 諸門ハ宮門京城門を總り控り閤門ハ

左右京圖 左右衛門府當直門圖

東西一千五百八丈 今四十一町五十三間二尺



南北一千七百九十三丈 今四十八町四十間四尺

雍城門 朱雀門 偉鹽門 左右衛門共了守了

此外ハ朱雀大路を中納言ノ左京ハ左衛門右京ハ右衛門
 大邊を守る

内中門を云とありハ長来永安門等を云と云れ
 園と合ハ然不時ハ左衛門府ハ當直乃門を羅城門 左衛門
 坊門 二条 三条 四条 五条 六条 七条 朱雀門 美福門 郁芳
 門 待賢門 陽明門 上東門 達智門 偉登門等の
 十六門を云と云れ 衛を云と云れ 職原抄ハ左衛門尉
 顯官也仍六位諸大夫并侍尤其仁を擇入登一近代
 沙汰了及云ハ無念と謂云一と云れ 頃ハ里内裡
 小一宮城門も全く満ちるに羅城門を存と云と
 左右衛門府乃南直ハ絶く久くありぬと云ハ當
 時乃官職も云職負令ハ合ぬと云知ハ一伯耆守ハ
 伯耆乃國司子補任せり云一好ハこの頃ハ一國ハ

國司と守護と二職を置建國司を職負令云云と
 社祠ハ大神を云 家數ハ人別 簿帳ハ百姓を字夫良
 社社ハ土神を云 戸を云 民を云 簿帳ハ百姓を字夫良
 農桑を勸課する云とを掌る好ハ守護を盜賊追捕を
 主と云

長年と云ハ長高と名乗せける云長く高ハ名一との勅定
 今乃名不改云ハ是年六月七日六波羅乃仲時時益赤
 松圓心ハ種忠顯朝臣等乃たあハ攻破らる云云東國を
 落ゆける時益赤ハ流矢ハあつと云命を云ハ仲時
 ハ自害一失ける云一船上ハまゝ云一都ハ還幸あ
 る云云一仰出させける時ハ長年を云ハ島解由次官光守
 承久乃先程了依云考ハる云ハ六波羅ハたを云ハ攻落すと

ふとも強食乃安老いさく修定せある所ハ終けし御還留
あまへきう一奏國一けしハ之上御自身周易を以て清一坐
を考へて執らるる一師乃之六を約させらるるか及丈人七下
ふくく答ふ一といへる還幸行乃支障りありんとおり定め
らして六月廿二日船之を發せらるけしハ長年平劍く風
釐乃清有り供まよと

還幸乃清通筋山陽道と云はれは船より米又へ至る
き里それより備比へ三里溝より二里二部二里板
系二里新谷一里之鴨二里高田一里久勢二里壺井二里
津山二里漆間田四里大井二里佐用二里三日月小至る
程凡之拾五里才二日月より書寫ふに至る二里小迫一

五ノ九

廿二日船之を發ありく廿七日書寫ふ了臨幸と云
ハ一日凡六里許の乃御行程あり
車ハ之十里とあり一里ハ今の四町十間なり
の八里之町は十間なり
あく廿八日法華山臨幸と云この道凡七八里了
ムハ揚列晦日兵庫へ還幸ありく醫王山藥仏寺入
加茂郡ハ廿九日乃御旅宮いさ考へハ
廿終人九日乃御旅宮いさ考へハ
基菩薩乃建三本之阿弥陀佛ハ聖徳太子乃佛化と云
本堂乃後了稽文旨稽有薰殿刻乃觀音堂あり堂の東
小靈泉あり相傳ハ後醍醐天皇當ふハ臨幸ありける時
御不豫あり向ふ依りて靈泉を汲く御藥を調進し
る小忽御平愈あり一ハ藥仏寺乃号を給ふといゆる

伯耆守長年朝臣真蹟

柳菴珍叢

長年朝臣おののちね元弘二年閏二月廿九日おののちね船上山ふねのやま合戦乃賞あづかとくく二月
左衛門尉さゑもんゑい了補りょうほ伯耆守伯耆のちか不任つら還幸かへさき不供奉ふくほう建武元年春たけむし因幡
伯耆乃守伯耆のちか護職ごしやくたる日ひ伯耆守伯耆のちかを子息こひ義高よしたか護ごりる中なかつ系圖けいず不な足也

伯耆守
長年朝臣
真蹟

伯耆守
長年朝臣
真蹟

一
 海軍大臣
 西

又
 海軍大臣
 西

元弘三年七月 郁芳門の沙汰所乃上郷九条民於々先徑御寄人の捕正殿
 衣和長年たり 如言の至ハヤク詳ニありとレト由駿河國司より勲功を乞上
 せしを沙汰所より 札彈ありとて 紫塔を給入る 故に國宣小依の文
 ありと知へし
 此書翰の裏に 眞名家辨辨を書たり
 故に紙乃上下を裁切ありと知へし

六月廿日兵庫よりすの東寺入りせり五日二条富小路の
内裏へ供奉乃儀式を刷ハきり移々入御す一七日冷泉
萬里小路乃内裏へ還幸ありぬかく郁芳門乃尤吉乃沙
汰河を置く九條民部卿光經卿を正卿と一又畿七道乃
万機を沙汰せり是官軍勲功乃勸賞了ましくハ楠正成と
長年とを以て奉り定めらるるハ長年在國しく國
務を修めとある人依り子息義高を奉り伯耆守と
本國より還らしめ長年ハ京都に住せり形り
或云西洞院の六条
今ハ東通り西洞院ハ幡下建武元年中興乃帝業官軍後忠乃
布屋町かとよととりヤ
致ととありえより優劣を論まされり違ふといふと長
年ハ船上より迎へしや一忠切拔群ありと一因幡伯耆乃

守護職とされ舎弟長重長生等をとり一旗門葉了至と
程く了繁昌きと併ふ他乃身目を驚りきり建武二
年六月西園寺公宗謀叛乃同ありけるふより公宗謀むハ由
長年と中院定平とふ仰らるるハ長年定平二子餘流あり
北山乃亭へおしよせ公宗以下乃凶徒を追捕し罪乃首從
を執り公宗をばお雲國へ流しけり公宗をたて長年
公宗をたて長年公宗をたてを信せしため定平乃家子幼向ハ
中門乃前より轉り乘んとせしハ公宗を長年公宗の髪を
て引みを腰刀を抜く首を掻落すと仰り公宗公宗與力の
公宗時次相模時兼各裁等東國へ逃下り旗を奉りハ公
と征伐ありと一公宗利宰相公宗を東國へ逃下り

上尊氏より朝憲を忽徳一源信乃沙汰ありけるふより新田
左中将義貞朝長より節刀を切りて誅罰せらるるため赤松
へ殺向き後ち長年正成二人を以て京都の守護するハ
かきりあり後ち小義貞朝長合戦利なく尊氏勝ふのりく上
治是教より同くは長年小勢多橋を固め尊氏を待
たしは赤松園心久下時重等尊氏と與力く山陰山陽
兩道より京都を襲んとせしにす後醍醐天皇山門へ降幸
ありけり同く長年勢多よりさくふ赤坂中へ馳来りんとハ
駑ちりり安うり色と由今之度内裡へ傳り来りり後
乃喇あまふりり三石條橋をり具りり系へ引りり
建武二年正月十日悪日と尊氏いりり入洛せりりつ是共

田五面國乃兵數万珍系白川了充滿たるハ腕うけぬ乃坐
印を忍びあしりり遮り打とれんとけりり長年うち
破りり十七夜より戦ふりり之百餘騎乃勢次第くふ負
討つりり内裏の置石乃さくハ下騎余りふありり子たり
ありり馬を乗るあり南廷り馳つりり見多ふありり甲し人共
礼を入りとせりり賢聖乃沙障子非相の卒乃垂簾処に引
ちりり一宮儀を心りりきりり多衣教之子乃宮女若葉を
糝ひり弘徽殿は月乃金鉤むありり雲臺乃畫圖後
りり不破ふ長年あせをりり洞を兩眼りりかへ鎧の袖をそ
ぬりりかきりりあまらりり休らひて屏りりけるり敵乃時乃赤同遊
りり同えけりり陽門乃前より馬りり打りり北白河を今遊遊り

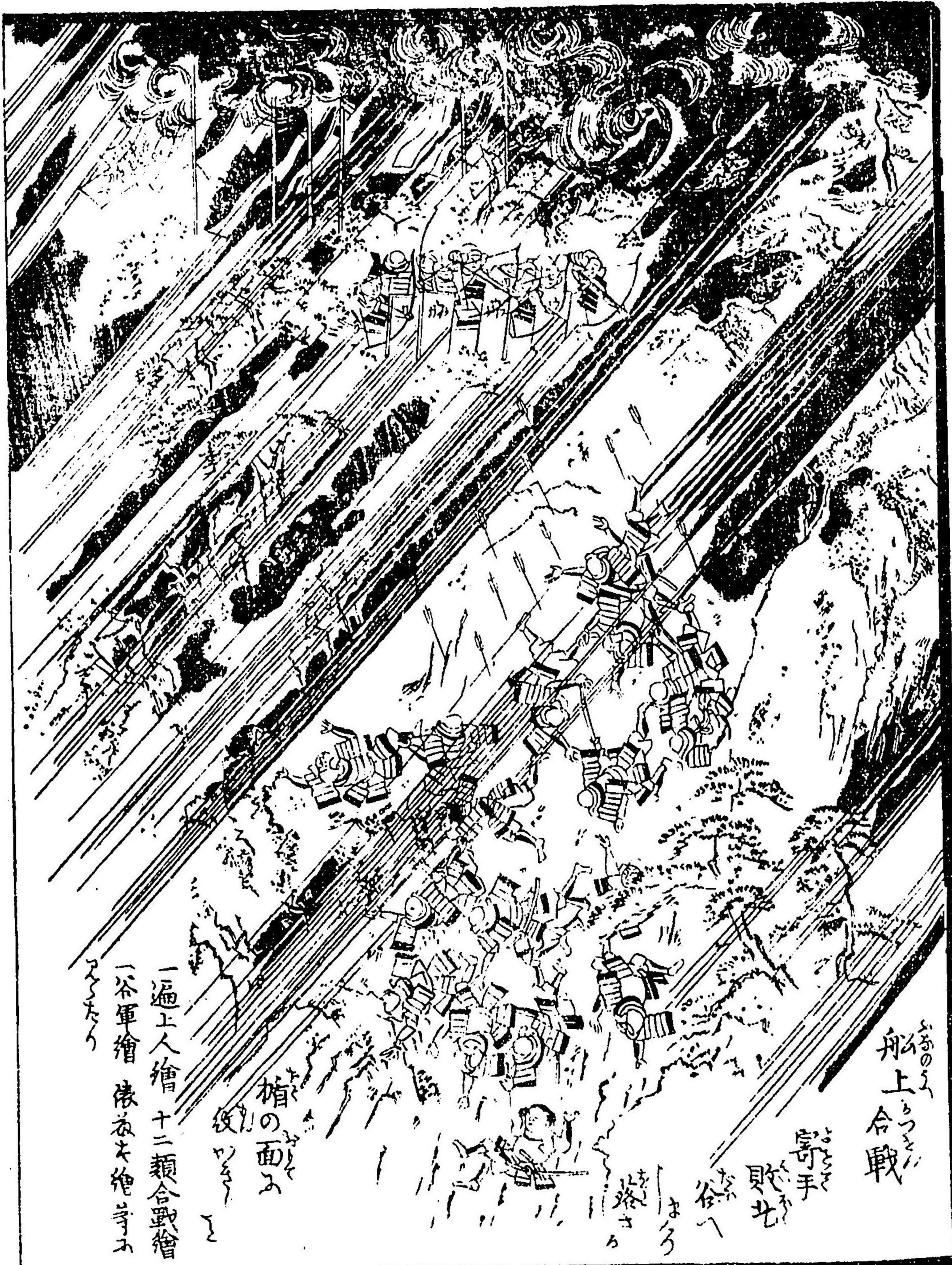
東坂本へそまうけかひふ不甲斐依濃乃官軍奥討乃國
司死衆乃大軍を起し東坂本へまらむと色ハ京教へ押
寄く守氏直義を誅伐有へしと云月廿七日乃宵より長年
正成結城入を之多條崎みく西坂を下り松本陣をとる
明也ハ長年守氏之森より今出川急へ押寄まり火をうけく
細乃下り斬く廻りしれと云守氏遂より打負く接津五へ
落りしハ守氏九列へおぼたたりと云かくく都下敵
一人もかくれしハハまよ還幸ありゆと云と云しゆりゆり
大内乃正月十日乃兵火不罹く空しく礎石のそを遺さる不依く
花山院をのみく皇居とふされたり
興朝平記了長年内裏を遷す
の秘跡をんことを難く放火と云
説を載せし由誤りし誠ハ
細川定禅乃燃たるゆり

て嚴ひよるし中國ハ早馬と云彼を打く告ありしハ
みく討留むゆととの宣言ふより義貞朝臣ハ中國へ進發し
楠判官正成ハ兵庫へ下向し義貞朝臣ハ力を合せ長年ハ
京都に留めらせけり多義貞朝臣軍志むく利を失ふハ正成
湊川みく討死し尊氏と云く小畿内へ入ると云しめさ也廿七
日あつひ山門へ臨幸あり六月七日守氏ハ兵西坂を襲
ふ守種宰相忠顯あつを防ぎ戦ひ破れし打死とおあり
八日守氏ハ兵東坂を襲ふ長年昭屋義助と共におも
白多越り防ぎ追討をせむち合戦たひくありし勝負ハ
互に牛角ありけしは因り晦日義貞朝臣守氏乃東寺の
陣へ押寄く箭一ハ射たすくハ歸らしと云く打たせし

此ハ長年同く打たる白鳥乃茶を正けるとき見物
ける女童この奥天下ふ之本楠 結城 伯耆 皆々 文字 一葉 あり
といはれざる人乃之人の打死く伯耆一人のころたることよ
と云けるを結城親老ハ五月十一日未ふく討死し楠正成ハ五月廿八日
澁川未く打死しお種名歌郷ハ六月七日西坂未く打
死すたるのり同くせむい長年今と打死せぬを以て
ひあ一人乃汝汝まれのあそ女童をわくひ云らめ今日乃
軍味方と討負一人ありと引留め討死せんとあて
猪熊をとりし押寄けふ追子搦手合圍相遠く義貞朝
臣乃二万余の陣乃東寺へ馳向ひ八条九条ふ扱
たる敵十万余と殺く之条河原へさりと引長年終
了味方ありも隔り止二百餘騎を一手ふあ大宮乃一葉

あく我とりし乃木戸をさ一人も残り死くけり長年
今年に十八歳とかや一説ハに十七歳とい或ハ十八
六歳と云又九列各和氏系園ふハ
に十八歳嫡子伯耆守義高次男基長之男高老をのり
ふ傳あり
京城圖り依り考るあり一葉乃大宮と云は大内乃東
北乃隅尔南系大宮大路廣さ十二丈と式り見地今乃
町法あり廿間乃路より一葉乃大路ハ廣さ十丈と云
今乃十六間乃路より京都繪圖り引留めたる堀川
乃廣六間半餘あり即むり乃四丈とあり教をれより西
み半町乃街は川小路は川あり凡百四十三間を過く大
宮乃梨本町より西梨本町乃西ふり今町屋ありたる

あくろ大宮大野十二丈乃内なるへけさハ長年乃戦死ハ
 六乃地おろへー長年并死し〜天保壬寅了ま〜六百七
 年よ忠誠義氣ハ日月とカハ光ヲ増とい魚とハ
 其乃身體終焉乃地埋滅し〜知人カ〜堂カあり〜以
 や余薄遊を甘ん〜東海東山乃道を過ると凡そ八廻
 蕉箱乃句碑を建るものを見〜年く〜お不〜一吟一
 詠カをそ乃子弟了在〜胸懐了蓄ふる〜能人カ是
 を貞瓊不勒し〜不朽をカハ不追遠乃志あり〜と云
 魚〜其妻家を被〜王事不後ハ身を殺し〜私愛カ顧
 以境了臨〜時了感せ〜吟詠了以魚ハ何〜但西肯壤
 乃差からんや

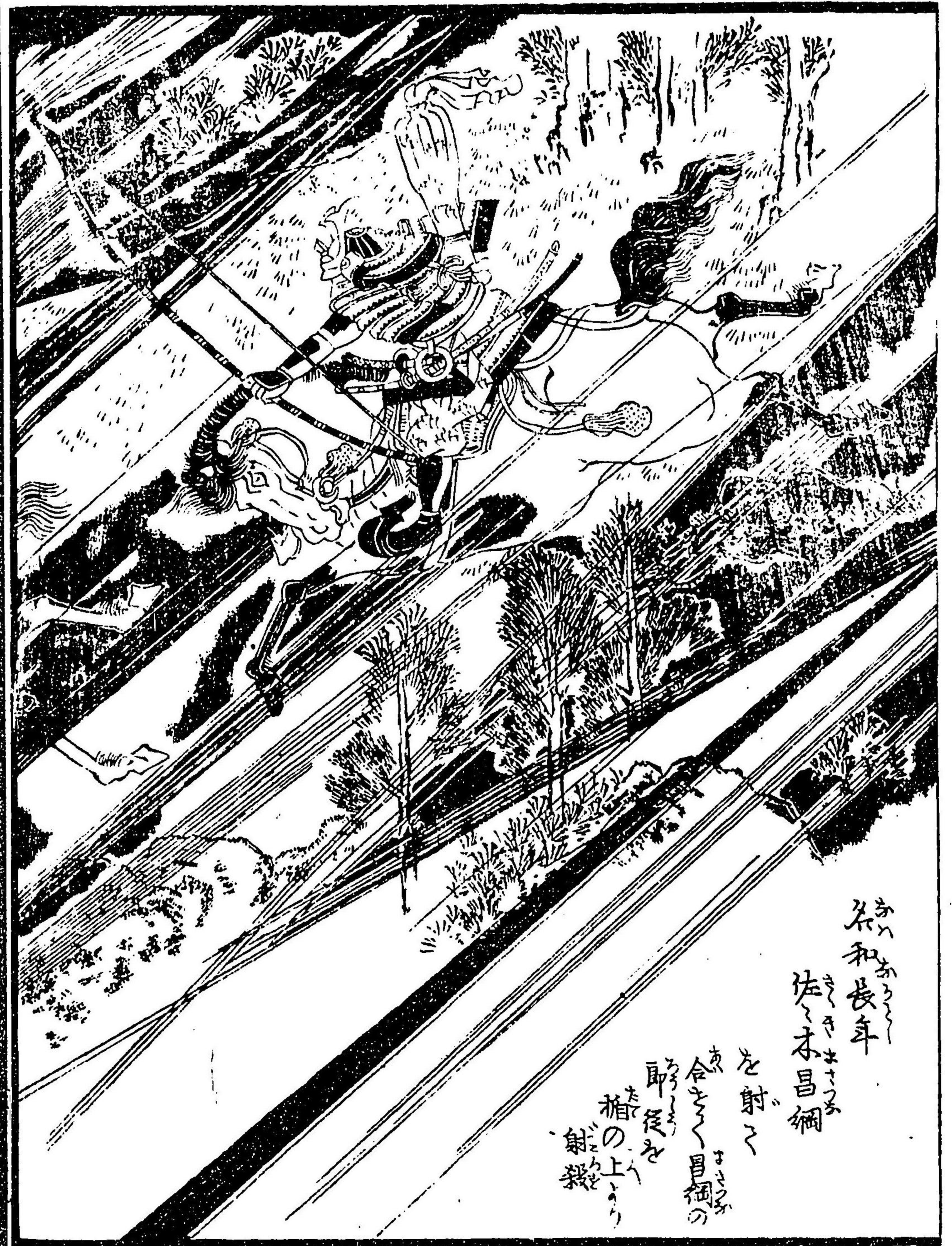
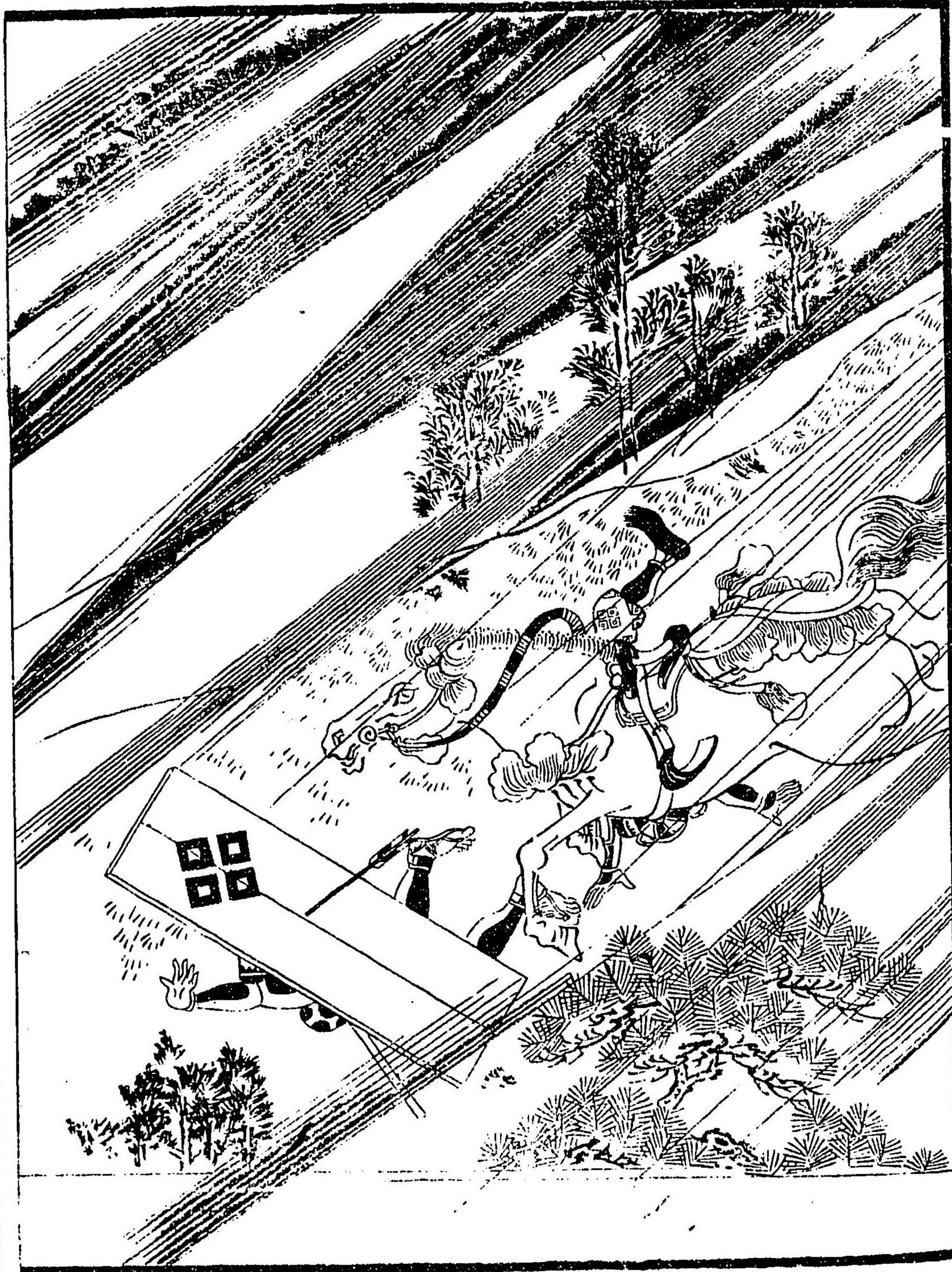


一遍上人繪 十二類合戦繪
 一谷軍繪 依坂大砲寺ハ
 二二二二

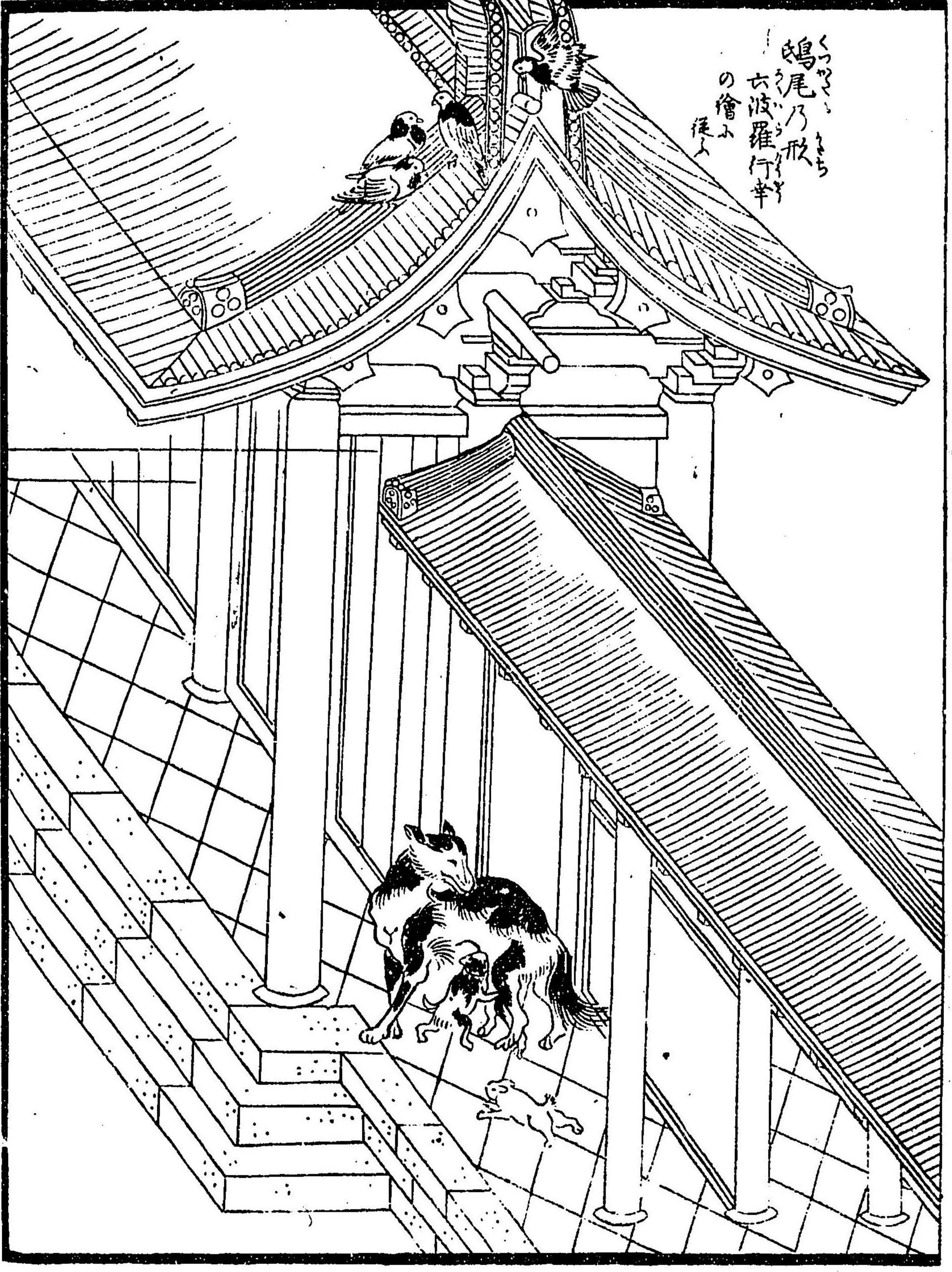
船上合戦

寄手 敗北 谷ハ

楯の面ハ 紋ハ

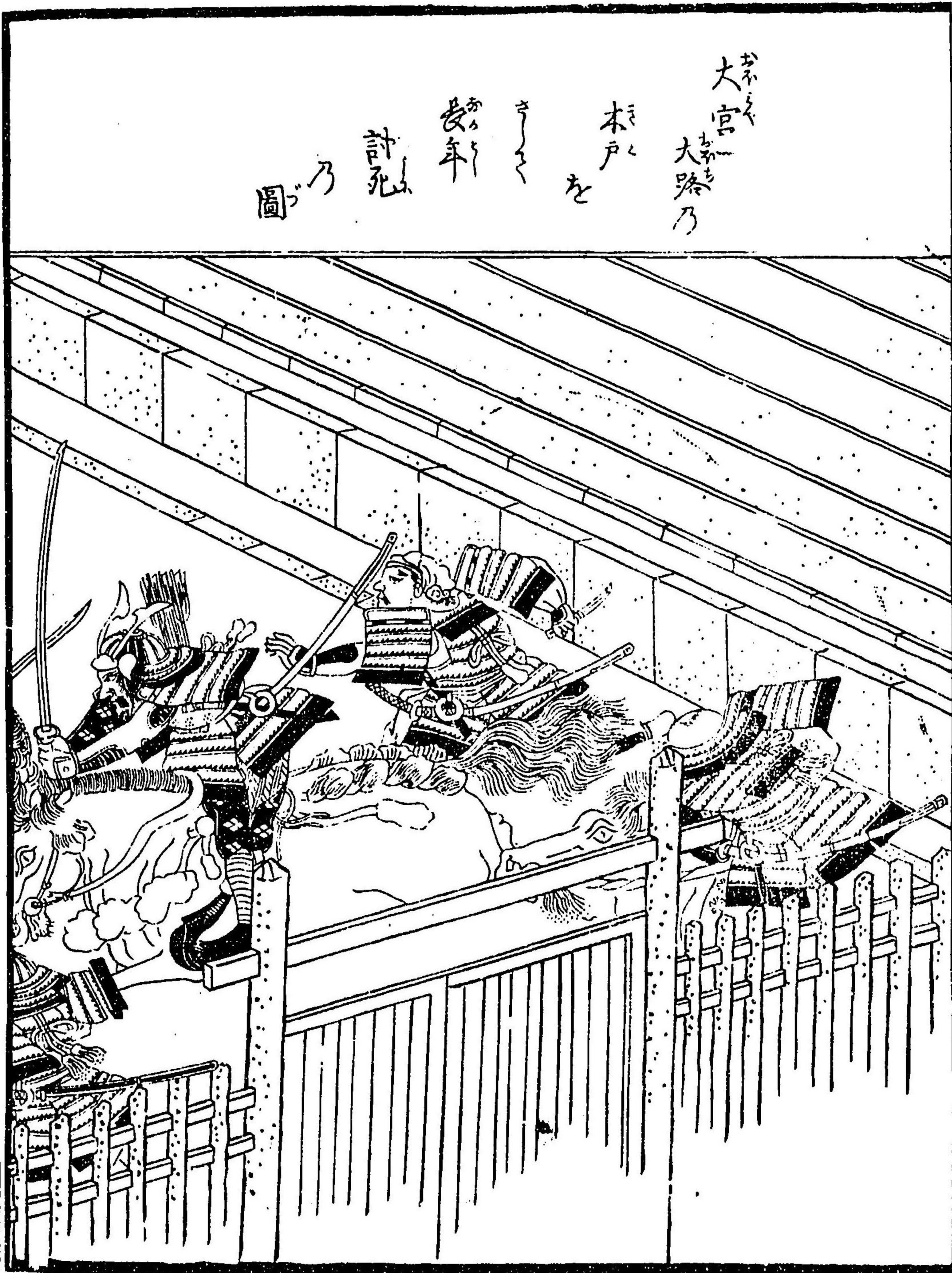


矢和長年
佐々木昌綱
を射る
命ごとく昌綱の
即座を
楯の上より
射殺



承久元年七月十二日大内守護乃右馬頭源頼茂
改四男源藏人火を放く大内を焼く如見ハ仁孝殿了
頼茂乃長男頼茂放火の事ハ後ハく程ゆふく後鳥羽
入く腹切了
大内門順徳乃之院畿外ハ遷幸ありハハ火ハく剛
院ハ裏を皇居とす大内ハ次第ハ荒蕪をまとも終
理乃沙汰了及く所ハを建武元年正月十二日安藝
周防の両國了課きく新ハ造出させ百十六年乃間
廢頼了及ゆる宮教了めく延暦の舊觀ハ復せしハ一
朝の春夢と共に破れあんとま教を見く各和長年乃
純忠義勝ハ了了哀れと思ひん棲違く去ふ思
いさるハ抑人乃良心形ハ強る了細川定禪了ハ了

火を放く宮殿を焼く何乃為るやむハ楚項羽と
漢乃高祖と共に秦を攻たアハ高祖ハ咸陽ハ入く
秦の宮殿樓閣乃廣大ハ不を觀く民力を竭きを傷
ミ項羽のちハ秦を燒く乃心我育とあらは
人乃為る有せらるを嫉むハあり定禪乃大内を燒
項羽乃咸陽を焚たると其意同くといハ定禪乃心
神器を窺ハるあふる不仁乃甚ハ罪誅を遁る
處ハ一と云ハ皇居ハ累代乃皇居ナリハハ四海乃
民乃膏血と筋骨とを竭く了了新造乃大内たり
是を焚燬くハ觀く民を憐むの心ナリと
云ハ讀ハ心を潜めく了了思ハ



長年朝臣妻を内河右頼女と伯耆大夫判官義高之
 郎左衛門基長等の母あり長年朝臣船工より基長を使ひ
 女性ハ行方へ申思ひ入館入ハ火をわけ焼拂へとあり時
 内河氏宣ひハ教ハ弓箭とり乃のる一とふ合んと兼く
 儲一とあり其妻と一ハつと一ハ三思入へ早館入火を
 けけ玉へ飛入見苦妻事を入ハハ足きと潔く足きけ
 也は基長乃妻もおおしく大方殿を以ハふ成さおと
 志まは一所とくともかくもあんと思切くつとふ付居
 たりとかや谷和氏一家ハ義夫烈女を聚め一と云へ幸あ
 るハ基長の乳母男後之郎近清あり死ハ一旦ふく安し
 と云ふ経く船工入登り生を全くせ一と

兼好法師壽像

雙岡長泉寺藏



兼好法師ハ天兒屋根命卅九代後曰位下右京大夫卜部
 宿祿兼各乃長子兼顯の三男形り兄を大僧正慈遍と云
 南朝了伺候一神風和記三卷を記さり櫻雲記三興國元年
 次ハ後六位上民部大輔兼雄形り兼好弘安六年壬申乃
 歳誕生あり或云弘安六年幼けあふボリニ親事
 中ふ志何つく人を慕ひふ風推乃道ハ彼番公乃孫
 を慕ひ和歌乃浦波心をも徳々頓阿淨辨慶運と名を
 齊しくして四天王と称せらる馬乃飛乃落んと以
 あり一上の寂憐光院乃邊みく馬を馳し男乃落んと以
 るをい水家と後熱草自讚的了向入り了後矢手扱ふ
 地也を論き同と九としく知金一後宇多院乃北面ふ忍

兼好九兵衛佐り補きり後位下右京大夫卜部
 兼好院讓位あり伏見院位了即ち兼好の事と云ふ
 後宇多院乃仙洞ありけり是ころ時内裏ハ冷泉
 万里小監教とく大御門院乃所新なり後嵯峨院
 侍りて終り兼好乃内裏あり形り今ハ東門乃北
 柳馬場の五町め惣町通りまぬ所高倉仙洞を常盤井殿と云
 ふくを町の新が一所乃と云ふ形り今乃寺町通下御衣前丁大炊兼好ハ位
 大炊御門京極形り此町乃惣一町四方の地あり
 洞系正仕まりり此町乃惣一町四方の地あり
 兼好乃方より最妍務かか女房乃色殊々艶りかる衣
 きく眉類り美しく髪ゆりくと長く一と云ふ乃ゆりけ
 兼好は月とぬる心地しく見おくりぬ傍り人り同ハ中宮

乃御使了系一一人了あそと云その後を休乃意くく
又ゆるく好く相見りさふこもり居く長日たかく降つゆ
る雲さへ我れおひふやましくへあやう
降る雲を道出さかまれうへん宿ふにかくおひん入ん
とかけさわたりふくや雲をく物をおりんと同くあう
婿さふ其おひゆをいひ出せのれふん伊賀守橋殿志
乃むさあふく中宮乃小辨あくあそあを道と云をたのそ
おちりく居よりく聲さくさうり乃契あくも願さくく
同くあそおとりの道ぬき雲乃心由待へうりける當の一念
哀道とい夢玉をぬりやと云いひやつて云々傳くも
と云るあまをさく打出ん云乃紫ゆあ

あつ勢もや木葉のくれ乃埋き味下ふあくもく絶ぬんを
とさうり好くたりかく云初く日教あ道とゆいあさゆあ
たのめ一人とへかひりくく
かういひい川をうさうふ白まきあそふ道き月日成らん
と恨まかあらた道と偏みゆきあけい夏乃夕ゆ
飛ほゆるまき共あさぬき井よりゆり入杖とゆやふらん
おひひを晴を由乃あけいハ初き共おひあま給をぬやと
まよあさうおれ乃之室の樹葉のかさぬ色ハゆらさ成る
あ乃教あぬをいとほくかと好くこもるあそ
まの好くやいとほくか乃命あ入よか金んと頼む計ハ
ん乃罰をといぬゆはちや色ハ

物おも入りる名やよきふ三ぬらん今ハ波をより人よか
かくいひくま色のハ女も素本ふくもあはれ孫ハあそんと云ふ
へまのりもあはれけりやよもあはれ月三日たちをれハ
あつた先おくこの葉をいひあぬすにかたふんをかけるさし
と聞えけむハ返り中宮乃小辨
今宵たよ井もさるりくさむらふ橋もる葉を人ふ見せば
さひおまききく遠くあはれけりそあむひすく語りひく兼好
さぬく乃名跡さるりふさるりあはれかへふたりの昔乃下道
昔乃ろへあはれけかせと朝霧了驚きさくおたまたらりぬ
種生傳ふけ頃堀河乃太相國基具と聞えりハ時了
五ひく街覺え日出るりうらうらと見むひく不藏と云

雨乃花井さるりくふまき乃羊の春もあはれあそふ遊ひく
く雨ふあ日川りりけかせ
早蕨乃もたふふをさく見れハ消し烟の泣を哀
か魚
見れまに後乃雨さるりあはれあそふ遊ひく
あそひ延政門院一糸とるやまをうあひたり
まきまのり方なり
我々く乃きたえよ知ぬ外よまき見乃水乃まきあふ
堀河太相國永仁四年十一月二日出家同五年五月十日
兼好十七歳
乃時なり
人よ知れハおもく通ひたるりハふせく見ひくたきと

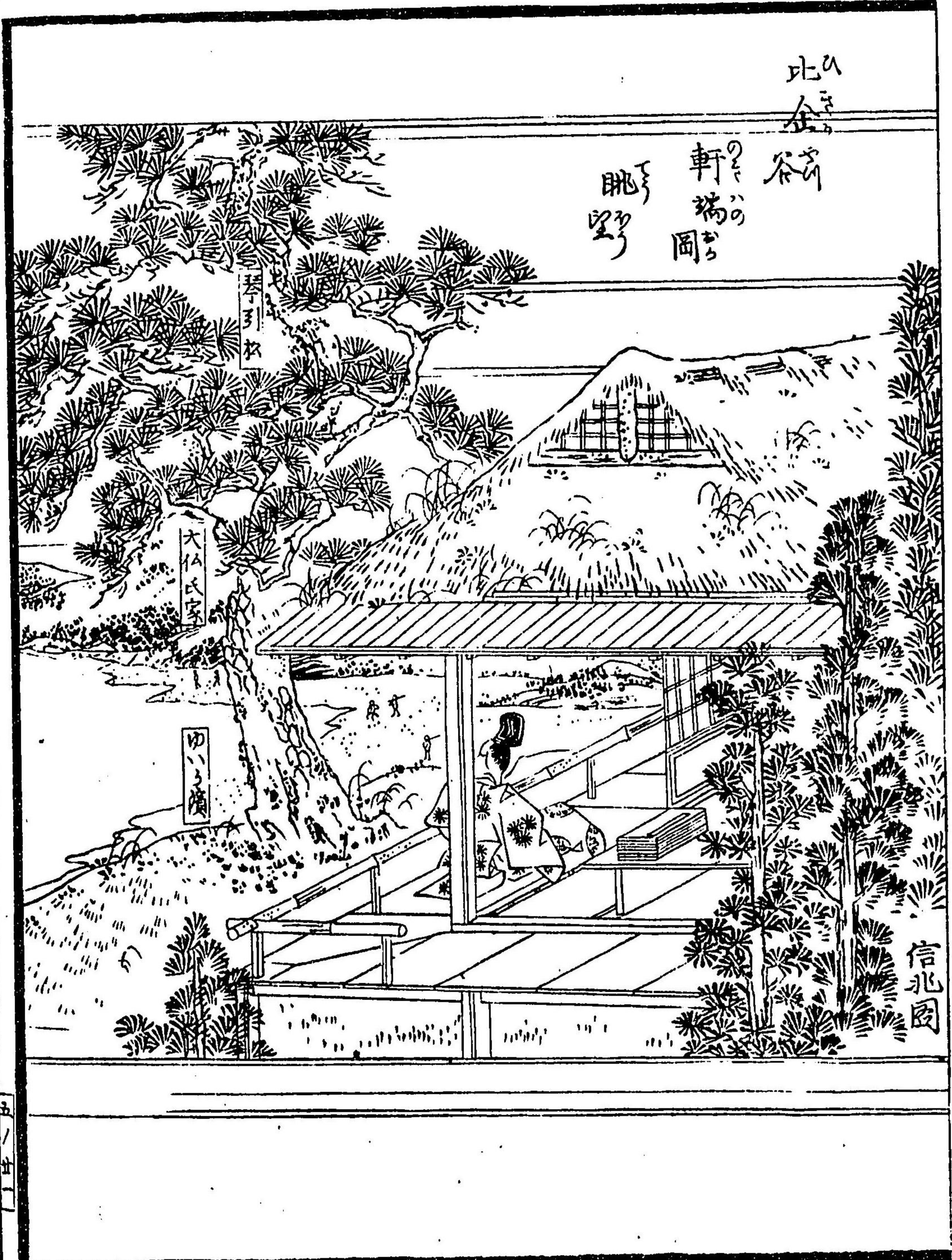
ふあまゝく還つてく續くのりける

志乃入山まてことかく不道ゆかふゆつぬふあとは人もあまれ
いふくく父持守け秋を兄出く打たらたま田舎へまじり
一間つあめ固く守らまじり兼ぬあまを侍聞くいけけ
かかーつせんおーまふ屋しまきあを耕乃まゆ居らま
まゆくおつま東乃まていさゆまいさう旅乃かま旅の宿乃
朝より富士乃山いとちくく兄也

都ふくおのい屋ら終しゆ乃根を朝々の岡へ出くも
兄かうま

鎌倉比企谷妙本寺乃境内了琴原乃松といふありその
松乃あるゆえを軒の岡と云う彼寺乃舊祀りこ

也兼ぬ乃秋けまみくよめ教りハあまき教り後花草ま
鎌倉の海に鯉魚と云魚ハ彼境りハまきねまあけ
頃ゆくかひをねあうそれハ鎌倉乃年より乃中流り
いけ魚をの進ら茶うりし世まきハたのくしき人乃あへ
出教りまへらまじりま頭ハト部もくまん切し捨体り
まねおりかと書たまハ鎌倉り後しここの懸ひあま
まやたきけ琴引松乃邊り居たらんふま妙本寺の
二代日朗上人在山中のまあま
氏文り載せく日本紀余け事を聞け地乃形勝を問
通證ふくりく見ゆ
了家士乃瞻望すこく言語絶く兼ぬの前秋實景を
賦きりとおり



平貞直朝臣乃家あき人ひく秋よまけあうる免ゆ

古郷のあきぬありふ道絶く旅寝まかふあ乃浮き

人よあ涙おとけりまそれよりあきぬ金次とひあぬる

あきぬる

平貞直々北条遠江守時政乃三男修理大夫時房朝臣の

孫陸奥守宣時朝臣乃三男民部少輔宗泰乃長男なり

時房を尊卑公脈了大佛氏の祖と標出と云としハハ

ありん 大佛建玄ハ勳長四年小しく時房朝臣の卒せし

仁治元年四月廿四日を距一十二年なり或ハ其

代新を建玄ありしなり 貞直より右馬助了任一のち

陸奥守とあふま家 稲瀬川乃東小あり今大佛の

切通一と云邊ありしとかやけ時文保元應の際ハ

南へきり張りの兼好二十八九乃隕小や金澤少くハ

称名寺乃院内了住き由云傳ふ也とハ院宇今ハ頼

破く其社定りあき兼好家集了武義國金澤と云

あき首任一家のいこうはあきゆくとあきく月何をあ

古々乃淺茅乃庭の露乃よ子床を多葉と宿新月あ

とよああけいあきあきハ金澤へあきく一と両度と関由

あきあハ都乃空のこあきくありし事あてあきくあ

驚りあきくあきあきあきあきあきあきあきあきあ

水免ぬあきと澄新とハあきあきあきあきあきあきあ

あきと云く居るあきあきあきあきあきあきあきあ

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ

おは乃つまらくばせりかき人とありし中さへも昔は
人ありしわいすの尋ねたり

おくれわく跡も人法乃勤先あり今いとも形も名法あり
ありし者もいふけりく塚乃邊の草枕もふ雨もそふる

扱もさる雨も渡もふるまをなにかへりこぬもさるらん
院へ集りたりまめいりらふ覚しめされたりは後々世の政

を内す持りり開えさせ給ひく暖瀬乃大覺寺も移らやあ
りやん

皇年代墨記了元亨元年十二月九日法皇後宇多改稱
法皇ありしはあきれ法皇外記了建治帝元亨元

年四月大覺寺教所造是密宗を偈多ありし中さへ

大覺寺舊記ハハ法皇所移徒元亨元年十二月九日と以
て等の説ふよきハ兼ぬハ十歳の時よりあり

清法也くハ兼ぬより久不歎とらめきれけ色ハ奉るとく
法閑寺乃道我僧也乃許より入りきりける

人志也ハ朽とくハ危き云の葉を天は是と風も教らん
傍正也危し

ことりや天つそより吹ぬる森乃木の葉をすりさ抄ひらる
道我僧也々日野俊業朝長乃曾孫東寺乃執事聖譽律

師乃三男あり東寺乃長者より聖譽勅院と号り以故
も住ま

正中元年六月廿八日後宇多法皇實年二十七歳大覺寺

教少く崩御す一廿八日大覺寺乃良乃心慈蓮花峯寺
の傍に葬めなむ此時兼好に十三歳世乃中の如くも
たつ形をたれハ切ハ方りりたし賢き人の驚くことを知
れりし時一幼きより深き津恵了別おつひちり一以名
おしく侍後乃業いと懇うは入るる世を背す海と心
まじり乃ち林の如く

世乃中を秋田へ移す方ふあめ海一林乃中へ移す浮世に
かくく比叡ふ了乃ちり横川みく本意乃如く多年拜趨の
冠帯を脱ぐ之世了を乃持多羅を脱ぐしその名を改めん

兼好法師とやてりその程乃こ

此をりくは浮世乃外ハ赤々色と由道きりそのハんありり
靈山院みく生身供の式を書し契り書り

うり人愈さ便里とはあせ水笠乃如く人々も世形と由
靈山院ハ東塔北谷あり中頃竹林院と号しけりり
今も一禰名り復て天台を女一世少僧都陽生の坊
たり兼好乃頃ハ天台座一正僧正道潤乃住せり
ゆり時より道潤傍に二条園白良賢乃九男みく教
法印良志乃叔父あり
持く不病を傳ふなる

常ふまじ深ふ乃解了たし人々も乃如く雲やもりん

彼天公大師の月隱重山兮拳相譬之とのく備ひくかた
ひ壽し形り又津堂豊山院乃極をえ色は永仁六年とかや
彼久世乃二位又部乃大衆徑津供養乃折のありく
孫けるうかと言く

ひくまをあま色とまのふま代まのくまふまの松乃秋
と書解らまたかろ霧ろ打残まの幽り見持の比良色ま
松風を総ぬくこと同くみ昔乃秋の縁あをかろ
おあひま金動寺まの夏の折明るを月をま
冬の色乃三まえぬ山の甲斐まのまの月折く短折の月
小倉乃宮の伝まのひくろまのまの谷ろ有月乃月
おまろろまの曙ろ色ろ花を折く傳ままらんと甘と

月殘り露むまのんあ大離乃花を折く佛小供まんと
ら色けろを今まのひ出

むろおの入籠乃花をまのまの今まのひの
延政門院一系も今まの時を失かひあまののまま
よを伝るまのひおま

おのひる色のかまのまの伝るまのまのまの神の
返

思ふらんむろのにかの世乃中いあまぬまの世乃伝る
世間まのまのあまの中納言資朝々右少弁後基朝良を
鎌倉より使まのまのまの下里ぬまのまの耕乃肉のうつ
里あまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

ついでに友と入るるを教にいと昔の思ふ如くつか
正中元年九月廿三日丙午中納言資朝卿義人氏後妻
鎌倉へ下向ありしより皇年代累代公卿補任等ある由
大乃順兼好寺田山に任しけりあはへ
あふとく頼阿法師乃侍へ

よもさく孫の先のみをたまたまもゆもたふたふたをいせ
孫たちへせふゆりとりめを向乃首尾ふをさしたるなり
頼阿法師乃の魚

よゆらう孫の我せこをいかにかをさふたふたをいせ
と孫をかくとと魚教あり世乃中の魚おの
やふく頼阿双林寺
さめるころゆ

後醍醐天皇隠岐より還幸す向け色ハ中納言為教卿
乃侍へ

代々をゆくおさむ家乃ゆか色は志りそ騒く秋秋の浦浪
いふと如く都もまきりく成け色ハ本曾乃ふあきりく
市坂乃あきりふて

おもひたつ本曾乃麻衣あきりく色は色ハ他の色ハ
と河く庵引むとひて志りいひり

本曾路名所圖會ふ兼好法師菴堂乃跡ハ霧原ハ乃中ふ
猿猴を教と称するあり兼好と猿猴と音便通を教より
山中乃志訓すりしを今いま猿猴と呼人と見ゆ余本
曾路を徑細き一ハ夜落合驛 義濃信濃 了至す霧

二田の壠

原山を東北乃が二里許ふに新驛長兼好法師の工
を向ふむうハ落合より巖原ふりやう御坂よりハ即
大井驛より多岐林より出る道これ也と云す向兼好法師の
宅地あり今ハ田圃とありくむあり兼好菴乃字をのん
と云猿猴屋敷とおありそや名をいふ
去此處ふりく麻猪ふと多々終ハ國乃お持するく庵の
不よりすく戦を追く人あま具くく人あまなれハ
あつもま浮世ありたりと云ふありのふ所とわら
と向くく東の方へ赴き今浮きくこれより鹿島の社
より訪く志つうふ法施ありく
春日の霧みそりつは東後乃道乃くくすり出一月

そ終よりすく都路へ赴き西乃海の果を見照里都み城り
仁和寺乃をありハ乃岡と云妙く無常ありけくつをり
よ橋を橋く
あまりおく花とありハの岡乃へるあま終くよの春をまてん
今本道乃長泉寺ハ兼好塚ありハ城名勝志より二の岡
乃西の麓ありを遊世岡乃軒長泉寺ハ後まて云ハ壽
志をそ乃す引移せしやと云なる終と其塔をみるハ
まそのともみん
伊賀守橋成志ハ新老を乃むハく戦舎ハの有ハ昔の
怨めさも今ハ中ハ忍入へる語らんとく招きけしハ
下アふく彼國乃くち國見ハ乃ふりと田井屋と云妙ハ菴

去つらひくそ便しける觀應元年二月三日兼好法師病臥
り一岡下し和氣清元小勅ありく藥を個をせせり色けるふ
勤好法師勅定乃りてけかきな去とかれとも生死無常の速
かたしと世捨入りの絲々として設る系とく頭をうりく是れ交
を清元もせんく妙くく都子還りかくと奏しけり二条殿下
良基 尚書を岡下所務乃り申あり引給おんはと披書ありく
いそり伊賀國より下向し海一舟名紗乃り所相傳ありく返ら
き後ひしとやおあ月十日卯年二十九歳ふしと四寂
せしと成忠乃り評しり都をりける洞院相國を賢をりし親
りり方くへ告たりける菴乃り心入殘と去ハ本系乃り法華
經自序乃り老子經源氏物語傳慶應のふ乃り春樹阿り書たる

その外ハ夜乃り衾と餉乃り器ハのりなりとや以その頃夜仕し命
松丸と云童日を燈く致下良基へ奏しりけるハ正月廿八日
兼好法師のよめ多秋

有とたよ人ふあられぬお乃りやと我らふ近とあけの
内院 院中 明兩院 院乃り宮まけけをあそれと閑食く茶又
十石料是二子足を細く編眼寺の僧ふ仰せて園分寺ふ
葬りさ勢多の田井乃り本墓をつき二月廿八日權大僧都
を贈りをら連二七日乃り眞福を修せり色しとそ 弘禄七年
田原教の種生傳を註し其他 天保壬寅より翌と百九十
識書り考考しし要とする 三年了及へり

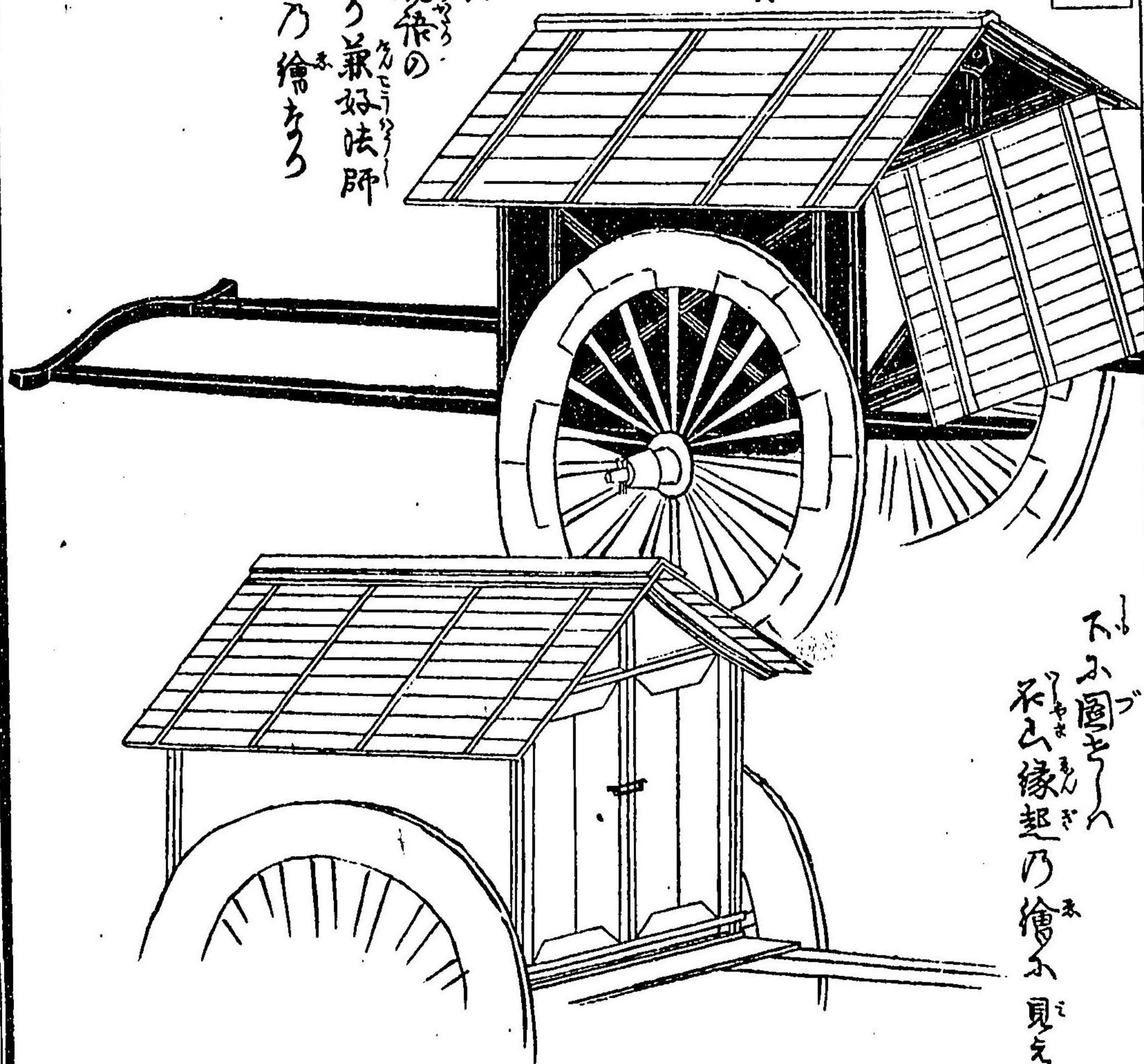
北畠准后伊賀國記了兼好東抄事終而又任吉田公或
棲並岡麓伊賀持守橋成忠慕旧友縁招之結庵于伊
賀國見山麓田井茂遂遂往生素懷於伊賀國分寺常
葬送之事田井茂築墓遍昭寺僧修法事多塔塔云觀
應元年二月十六日兼好法師と記さ致國太曆と同
け連ハ伊賀國少く回寂ふく一ハ心く説ふる
徒然草古今抄弘安八年小生色觀應元年四月八日
六十八歳ありて卒き教形り高僧ふみ授く西光院了
今もりて位牌ありと云傳ふ
高野山南谷乃内ニ西光院あり
と云あり
西光院あり
始と四月
八日ハ誤なり
同冬考抄小敷ふ乃兼西教寺了兼好乃位牌ありと南

中々墓ハ双岳ふあふり形也と今ハ處乃その由あり
と云 此抄乃作者浄福寺乃惠空和尚ハ長泉寺の墓を
かまハかくハ記さるるあり西教寺乃城の塔聖智
教院西教寺より一岡基ハ真盛上人轉寫ハ藥師如
來あり
同貞徳抄小徹書礼云兼好乃徳大寺院乃諸大夫あり
官罷にあり有け連ハ内裏乃宿直了系々孝小玉体た
禱にあり後宇多院崩御の後遁世去けり
職原抄小龍ハ
かま六位侍乃武勇小堪ぐる
兼好に補さると云へり
種生傳小内乃宿直より退ふりける小萩乃戸の登の
方ふあやけかふ乃趣をぬらうにを怒り下
る人皆悲しく述す人脱小所教ハ翔里入ありけるハ

文車

徒然草七十三
段了おなくく
見くかゝりぬ
ハ文車乃書藝
塚乃ちり

上小園きり
かゝり物架の
繪り載り兼好法師
より前より乃繪なり

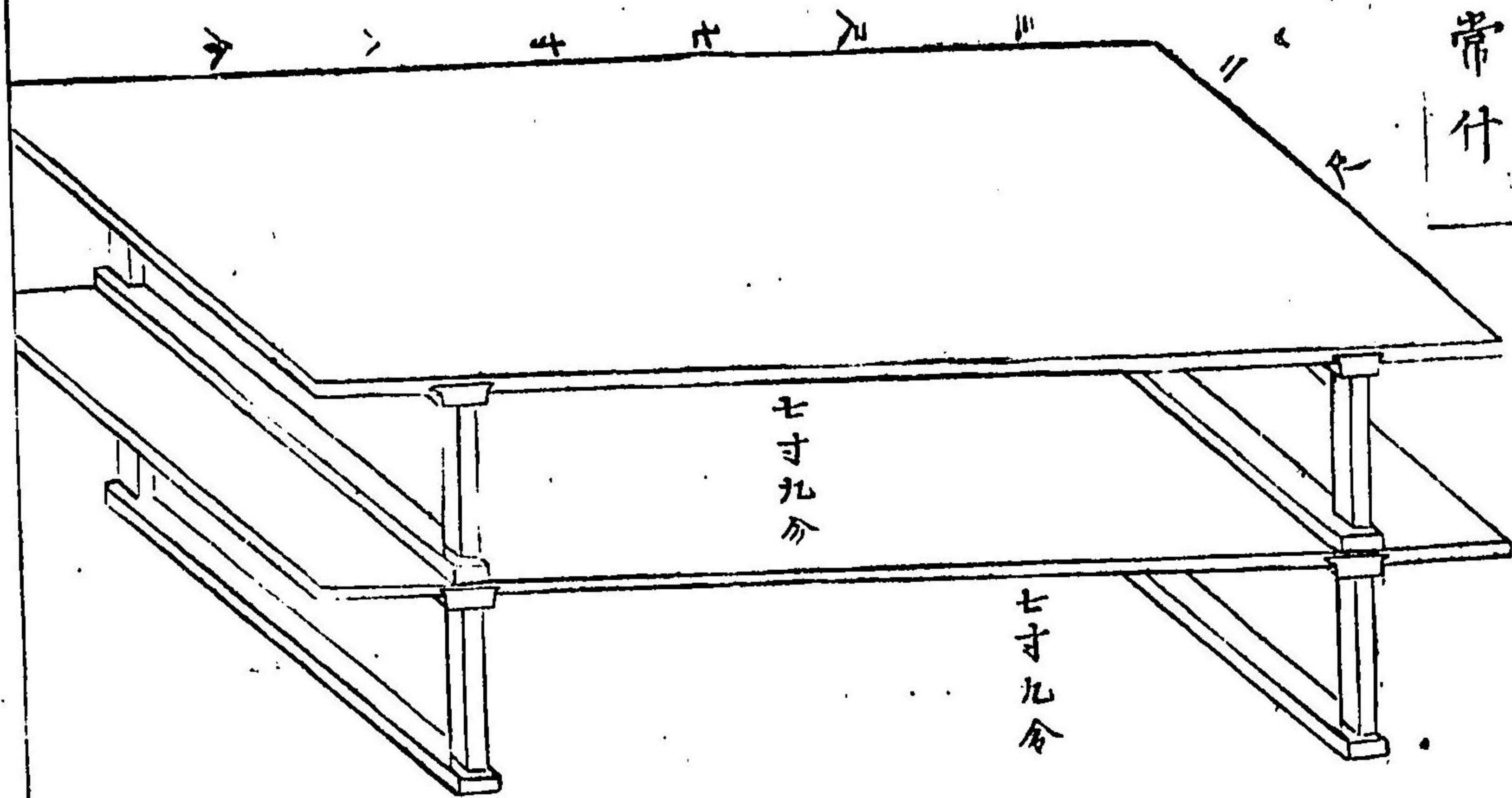


下小園きり
ハ縁起乃繪り見たり

文書棚

兼好菴室常什

山城國葛野郡柵尾
高山寺之尊院脇机と
云物全く一寸法と同一
竹脇机ハ開山明恵上人
用ゆり机と云ハ六百年
前乃典刑と云へり
ハ文書棚檜を以て作る
重ねてハ棚と云へり
校書初了用也へり



七寸九分

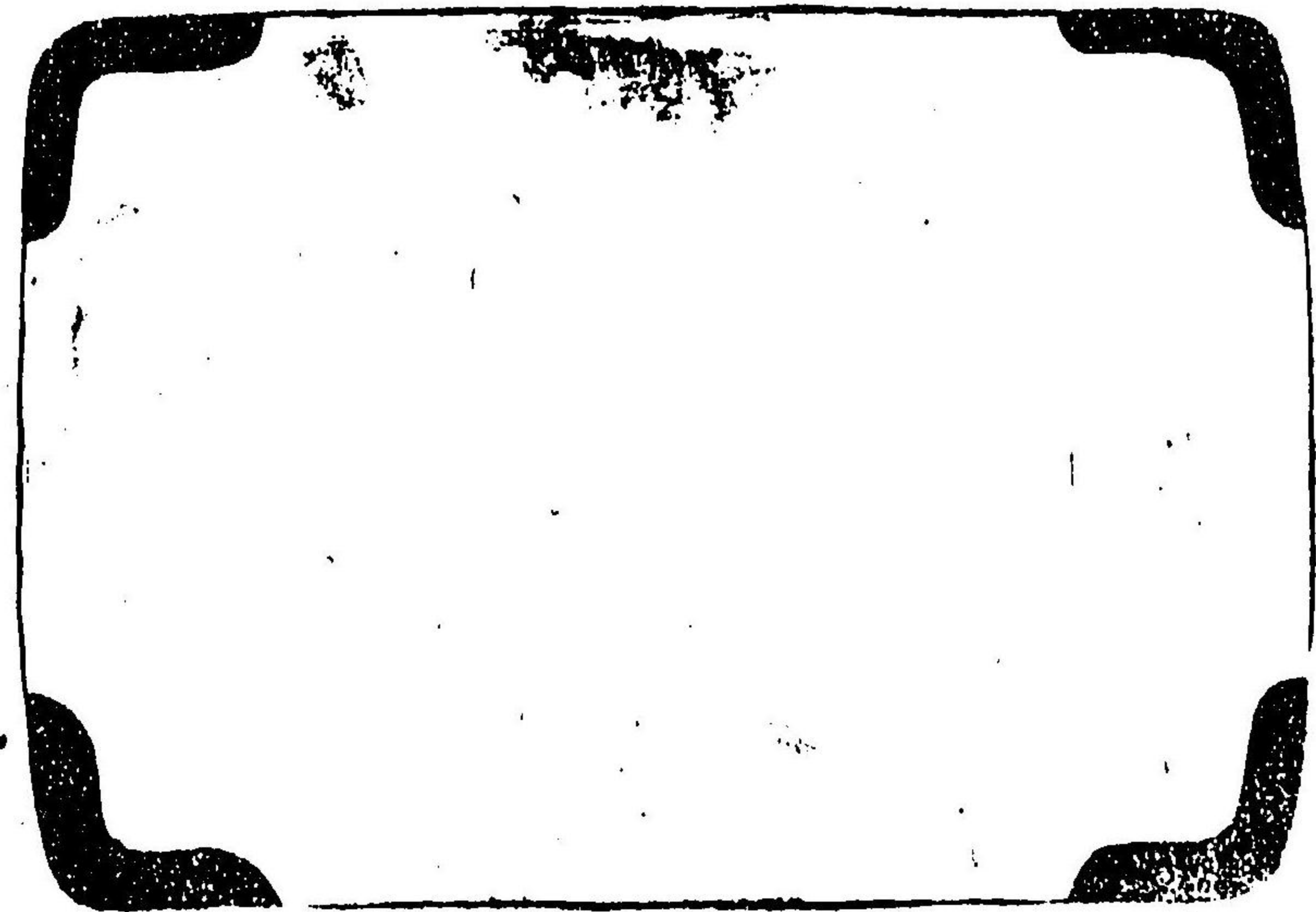
七寸九分

板厚六分

兼好遺愛硯 長泉寺藏



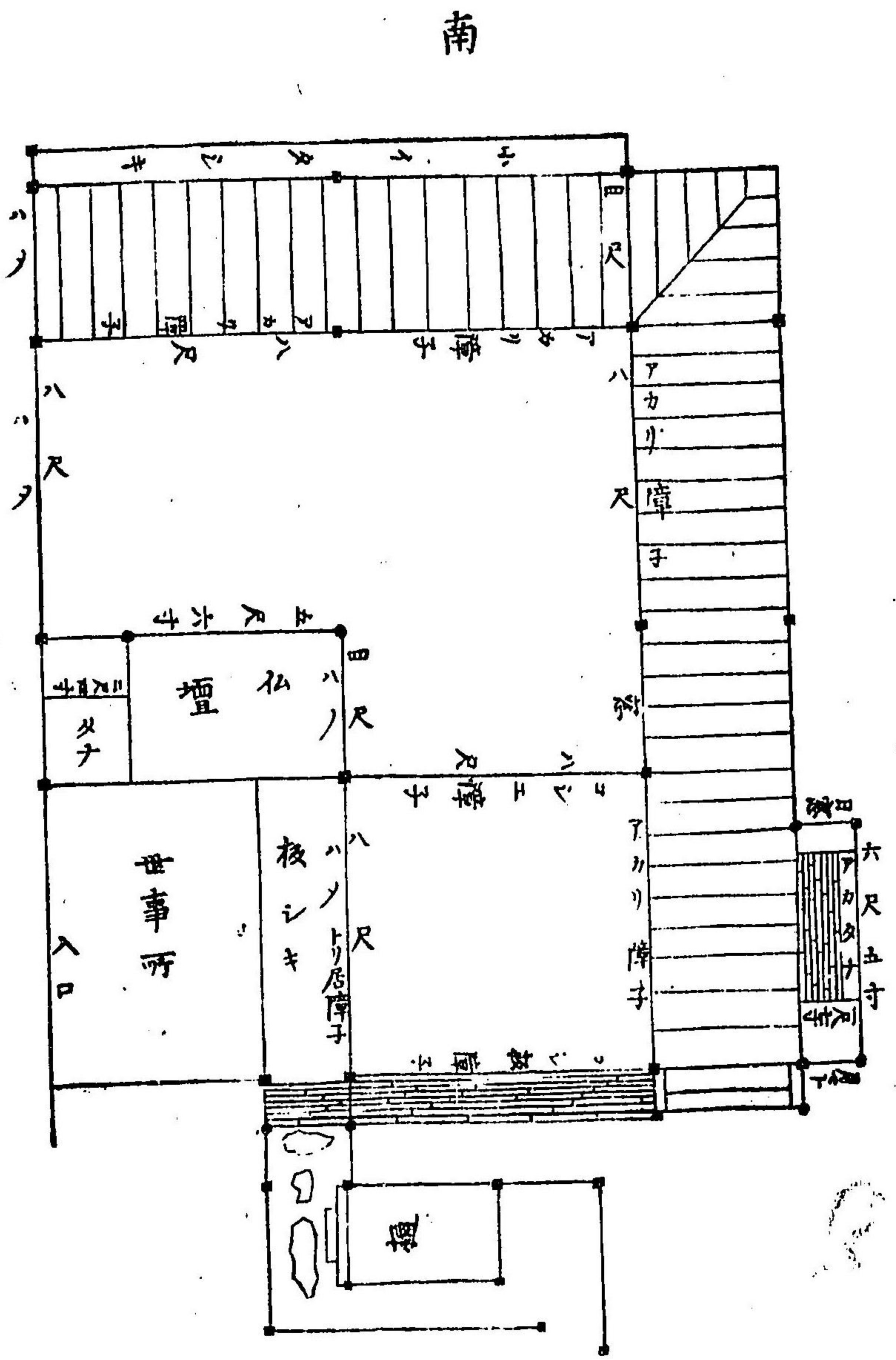
以石筆墨搨之大如圖



紫石

雙岡兼好菴室指圖 京師細氏藏

長泉寺の舊圖ありとも云



此菴室少く徒然草を著ハ一の由云傳人述ハ大肥經平
 乃詔の如く三卷を全くあは菴室少く書たるたう存
 下卷多延元二年伊賀園乃園見山禁乃菴室少く書た
 る中亦因人乃説了見拈括るる以菴室今を改作
 て指圖と違へ里又徒然草の抄ハ壽命院立安法印の
 抄ニ林道春乃野槌卷十三 松永貞徳乃慰草卷八 長頭
 九抄卷二 大和回氣末乃古今抄卷八 加藤盤齋抄卷十三 高階
 揚順乃句解卷七 北村季吟乃文段抄卷八 南部宗壽の談解
卷五 青木宗胡の鉄槌卷十 山岡元鄰乃増補鉄槌卷六 高田宗
 賢乃大全卷十三 惠空上人乃参考八岡西惟中乃直解卷十
 浅香山井の大成卷廿 支考乃讚卷八 等多く世に存る

兼好法師家集の首小家集事 秋負事不可定之多少
 隨意或十六首或七百九十首之百餘首と云く也 長
 秋連秋等相交贈答勿論也 又非贈答他人秋隨便多
 書載之 部立事合不之有之 雖有公中人不可然尤甘
 心者也 卷頭事無部立之者 上者可任意哀雜等又秋終
 勿論也 哀傷秋事自卷以才十又六番去之忠岑集如
 以 詞事如日礼物徳長書後又秋合判初是也 秋實お
 以次書其才學事事之已上得以意之書之とありくその
 奥書不以一冊者兼好法師自撰家集草本気彼集不流
 布于世如今幸簡々秀秋能去高観何去如之不堪
 感悦即誌之 寛永中三曆初秋上旬 長秋負外監通村

判中庵通村云
は十歳の時

兼好法師乃歎了

手枕乃野きの草葉に刺刺し身はからり乃かき乃きむけき
とあかを賞しと手枕乃兼好と称し頼阿法師乃

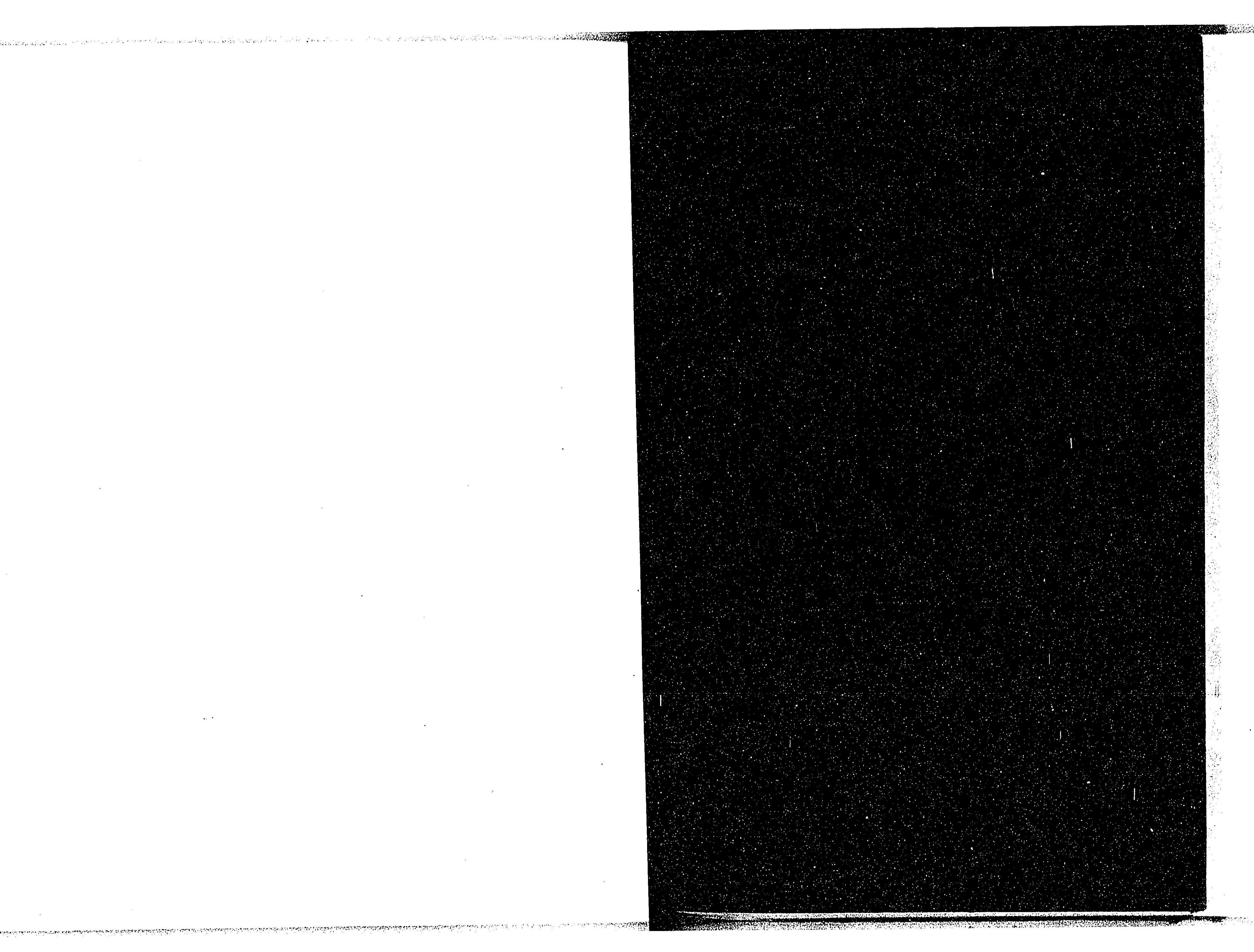
月宿敷浮田の面よふと鴨の氷よりたけあけこそ乃き
と云を以て浮田乃頼阿と称し浄毎法師乃

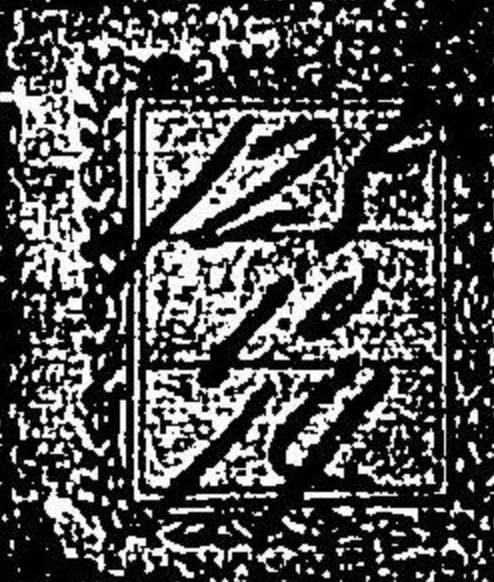
漆江乃あゆみよまるとの第子父老さやと浦風そふく
こ云ふく漆江乃浄毎と称し慶運乃

庵待人ふ乃まきおのく夕ひさうあうあをさるるあうのと云
とろろをいづく祇地の慶運と称し合さく私歎に天王と云

先進備像玉不雜誌巻第五終

125
10
14





先進繡像玉石雜誌

三